伊那西部農業開発地区内

木下並木下遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1974

箕輪町教育委員会
南信土地改良事務所

木下並木下遺跡

① **並木下遺跡**
② 北城遺跡
③ 南城遺跡
④ 猿楽遺跡
⑤ 上の林遺跡
⑥ 箕輪遺跡
⑦ 王墓古墳

序

わが箕輪町は先史・原史時代から近世に至るまで幾多の歴史上の遺跡に富むことは、郡内でも屈指の地域であるとされているが、今回大規模農道開発に伴ってその路線内にも、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が含まれていることが指摘されている。

その一つ、木下の並木下地籍も、西は一の宮の縄文時代遺跡、東は北城の縄文、弥生時代の複合遺跡の中間に位する所から、その関係の解明に資する遺跡の発掘が期待されるところであった。

幸いに南信土地改良事務所の御配意により予算もつき、団長に友野良一先生、主任に堀口貞幸先生、団員に柴登巳夫、白鳥伝両先生を御願いして調査団を編成し、9月下旬から発掘に着手したわけであるが、調査団の先生方の御苦労とともに、協力して発掘に当った伊那北高校歴史研究部の生徒諸君の努力によって調査が完了したことは喜びに堪えない。

予想どおり縄文中期と思われる住居址が確認され、この時期の歴史の一端が解明されようとすることは、まことに欣快に堪えない。

茲に調査報告書の発刊に当って、関係各位の御配意と御協力に厚く感謝申し上げる次第である。本調査についても、伊那市教育委員会の小池政美氏の犠牲的な発掘作業と的確な指導により調査がすすめられ、報告書の作製なども小池氏による献身的な推進と、団長友野先生の設計により見事、短時日のうちに公刊をみることができたことを特にしるし衷心より謝意を表する次第である。

昭和49年3月20日

箕輪町教育長　**河　手　貞　則**

凡　　例

1．この調査は補助事業による緊急の記録保存事業であり、昭和48年度中に報告書刊行の義務を有している。その為にこの報告書は図版を主体として、文章記述は簡略とした。

2．この調査は西部開発事業に伴う大規模農道路線内の埋蔵文化財緊急発掘で、着工以前に実施されたため、調査の主眼を縄文中期時代の究明に重点を置いた。資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

3．本報告書の執筆および図版作製は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

本文執筆者　　友野良一、清水英樹、堀口貞幸、柴登己夫、小池政美、小林恭治
（順不同）

図版作製者

◦遺構及び地形実測図　　友野良一、柴登己夫、堀口貞幸、白鳥　伝
◦土器拓影及び実測図　　柴登己夫、堀口貞幸
◦土　器　実　測　図　　柴登己夫、堀口貞幸
◦石　器　実　測　図　　柴登己夫

写真撮影

発　掘　及　び　遺　物　　小林恭治、堀口貞幸

4．本報告書の編集は主として、箕輪町教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　　例
目　　次……（１）
　挿図目次……（２）
　図版目次……（２）

第Ⅰ章　環　　境……（３～９）

　第１節　位　　置……（３）
　第２節　地質構造と地形学的環境……（４～６）
　第３節　歴史的環境……（６～９）

第Ⅱ章　発掘調査の経過……（10～12）

　第１節　発掘調査に至るまで……（10～11）
　第２節　発掘日誌……（11～12）

第Ⅲ章　遺構・遺物……（13～20）

　第１節　遺　　構……（13～17）
　第２節　遺　　物……（18～20）

第Ⅳ章　所　　見……（20～21）

挿　図　目　次

第１図　位　置　図……（３）
第２図　帯無川周辺段丘地形図……（５）
第３図　箕輪町竜西地区遺跡分布図……（７）
第４図　全体測量図……（13）
第５図　第１号住居址実測図……（14）
第６図　第１号集石群及び周辺遺構配置図……（15）
第７図　第１号集石群上部実測図……（16）
第８図　第１号集石群底部実測図……（17）
第９図　土器実測図……（18）
第10図　土 器 拓 影……（19）
第11図　石器実測図……（20）

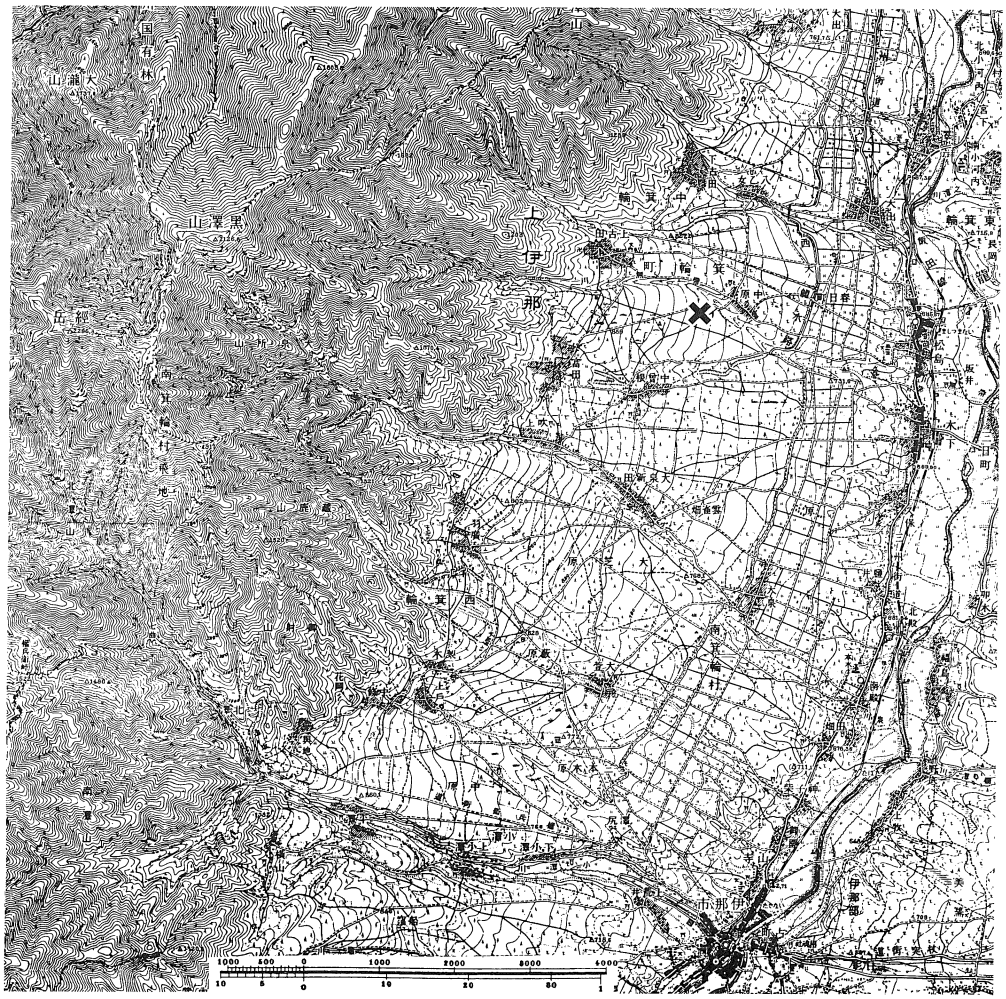
図　版　目　次

図版１　遺　跡　全　景
図版２　遺構（第１号住居址）
図版３　遺構（第１号集石群）
図版４　ト レ ン チ 全 景
図版５　遺物出土状況及び記念撮影

第Ⅰ章　環　　境

第1節　位　　置

並木下遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町一の宮14613番402～14613番411番地に所在する。国鉄飯田線木下駅を下車して、箕輪町繁華街を横切って西へ2㎞程遡った地点に位置している。標高は800ｍ前後を示している。富田・上古田部落の間を流れる帯無川（木曽山脈の北端黒沢山麓に源を発し、東流して天竜川に合流する）沿で、中原部落の対岸にあり、距離的には富田・上古田より、約1.5㎞の三角線上に存している。　　（堀口貞幸）



第Ⅰ図　位　　置　　図

第2節　地形構造と地形学的環境

地質構造

1.ローム層（火山噴出物層＝テフロ層）

発掘地点附近およびその周辺には、新・中期ローム層が堆積し一部古期ロームの堆積をみる。新期ローム中には第4・5浮石層（軽石）が夾在している。色は赤色でスコリヤ質ロームは褐色である。中期ローム中には第1・2・3浮石層が夾在しているが伊那谷の標準露頭からみると第1浮石層が欠除している。色は下位より白・橙・オレンジ色である。ロームは灰褐色である。以上のべた火山噴出物の起源はいずれも御岳火山の爆発の結果もたらされたものである。

2.段丘礫層

この地域に分布する礫層を古い方からのべると次のようである。

(1)高尾礫層　高尾面を形成する礫層で全ぐさりか半ぐさりの礫層、後背山地からもたらされたものである。

(2)大泉礫層　大泉面を形成する礫層で半ぐさりの礫が一部みられる礫層で後背山地性礫である。

(3)神子柴礫層　神子柴面を形成する礫層で、礫層中に中期ローム層中の浮石およびロームの一部を夾在している礫層（神子柴－1礫層）と新期ローム層中の第4浮石層の一部が混在する礫層（神子柴－2礫層）である。後背山地性礫である。

(4)南殿礫層　南殿面を形成している礫層で第5浮石層の一部が混在する礫層である。後背山地性礫である。

(5)木ノ下礫層　木ノ下面を形成している礫層である。殆んど天竜川岸に分布するもので、天竜川によりもたらされたものである。

3.段丘面（第2図）

この地域に分布する段丘面を古い方からのべると次のようである。

(1)高尾面　高尾礫層が堆積し、その上位に気成の古期ロームの一部が堆積している面。

(2)大泉面　大泉礫層が堆積し、その上位に気成の新・中期ロームが全部堆積している面。

(3)神子柴面　神子柴面を形成する礫層で、礫層中には水成の中期ローム層中のロームおよび浮石と互層し、その上位に気成の新期ローム全部が堆積している面、神子柴－1面といい、新期ローム層の下部および第4浮石層が水成で堆積している面神子柴－2面といい、この両者が神子柴面。

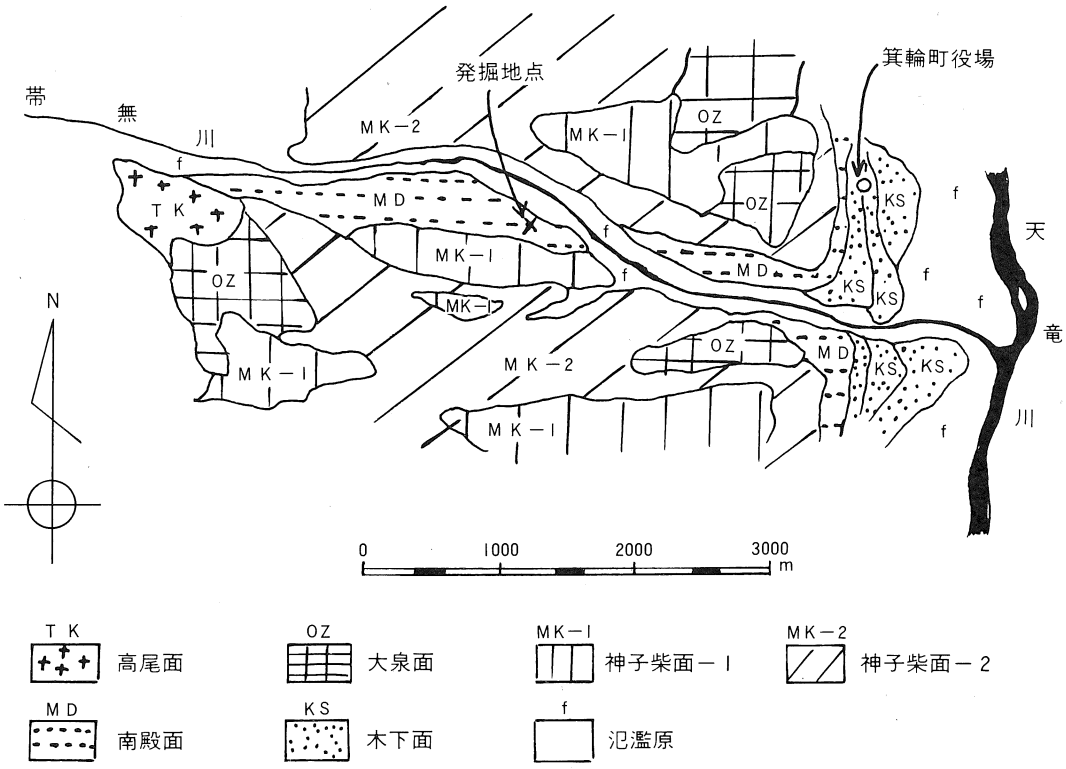
(4)南殿面　南殿礫層が堆積し、その上位に新期ローム層の第5浮石層の一部が水成で一部気成で堆積している面。

(5)木ノ下面　木ノ下礫層が堆積し、その上位に、新期ローム層の上位の一部が堆積したり堆積していない面でロームの厚さと段丘面の高低により木ノ下面－1・2・3と区別し、その堆積面形成の礫層を木ノ下1・2・3礫層という。このような

礫層の堆積面。

(6)発掘地点面　南殿礫層が堆積し、新期ローム層中の第５浮石層より上位のロームが堆積し、その後帯無川の氾濫があり、ローム層の一部を浸食し、その上部に砂礫（細礫）を堆積した面で他面より若干盛りあがっている面。この面を形成しているロームは気成もしくは水成である。

以上のべてきたような段丘礫層が後背山地から、気候的要因を主とした時期に過剰に堆積し各礫層間あるいは堆積後等に火山爆発による噴出物の降下があり、現地形面が形成され、その後において若干の気候変動からもたらされた小河川の氾濫等により支流河川岸に若干の起伏が存在する。



第２図　帯無川周辺段丘地形図　　1967　清水英樹

地形学的環境

発掘地点は、帯無川の扇状地の扇頂附近であり、その周辺には多くの河岸段丘（第２図）が発達し、８段の段丘を数えることができる。この段丘は、古い方から高尾（ＴＫ）、大泉（ＯＺ）、神子柴－１（ＭＫ－１）、神子柴－２（ＭＫ－２）、南殿面と木ノ下面に属する３段である。しかし、これ等の段丘も古いから海抜高度の高い位置に存在するものでなく複雑で低いところにも古い段丘がみられる。（第２図）発掘地点は、前述のような複雑地形面上にあり、南殿面上の堆積物を浸食し、砂、礫を堆積し黒土の形成をみた。その黒土層より遺物の出土をみる。また、この地点の盛りあがり等について、その地形時代の地史は前述の発掘地点面でのべたが、大体次の様な過程をたどったものと考える。

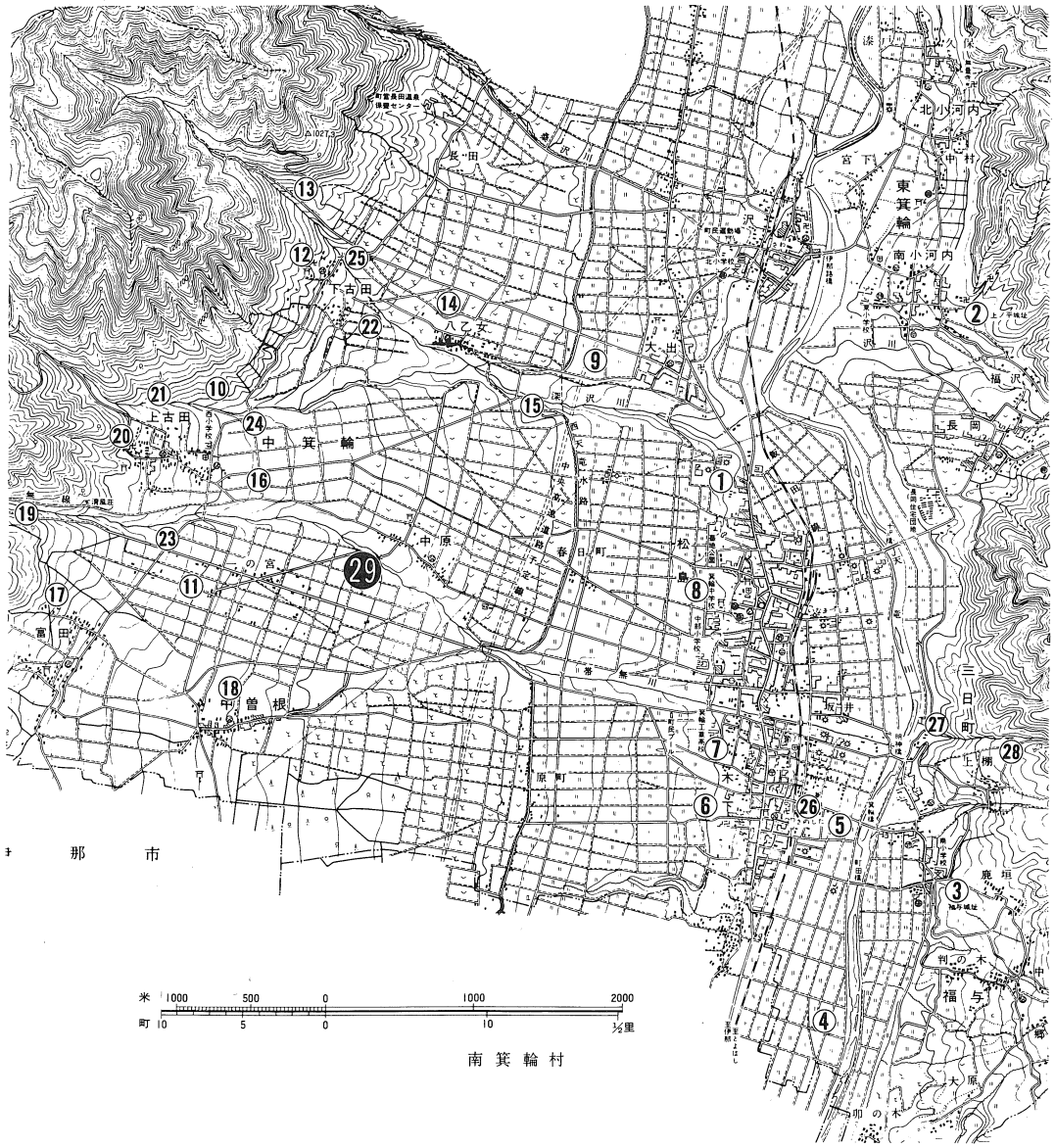
南殿面形成後気候的要因を主原因とする気候変動により帯無川の一部氾濫があり、南殿面上のローム層の一部を浸食し、砂、礫層を堆積し、黒土が形成され、先住民の住居開始という時代になったと考える。この地質年代であるが、この住居址の存在が南殿面上ということは南殿面上位には第５浮石層が水成もしくは気成という事実から推察して、10,000年前より古くはならない住居址と考える。　（清水英樹）

第３節　歴史的環境

並木下遺跡附近は、「一の宮」地籍として、鳥居龍蔵氏以来、縄文式、土師式の各種土器・石器の包含地としてしられ、（注１）このとき、古墳一基の発見が記録されていることは、注意されねばならぬ。さらに、帯無川を越え、北数100ｍの「中原」の地からは、半磨製石斧などの発見があったことが、古くからしられ、「中原」地籍の通称「矢城」からは、土師器・灰釉陶器の発見のあったことが鳥居氏による調査後、あきらかにされている。（注２）現地より、北２㎞の深沢川沿の「下古田」には、縄文・弥生・須恵・灰釉と、豊富な包含地が、深沢川に沿って点在し、深沢川が分れて山麓に入る南の「上古田」地籍に近く、下古田・「待屋」遺跡がある。「待屋」の地は、東山道「深沢駅址」の最も有力な地として知られており（注３）そこは本遺跡から北西1.5㎞に、ほど近い。東山道「深沢駅址」設定が、この山麓線、帯無・深沢の上流にみられた、歴史的背景を追究すれば、縄文・弥生以来の生活居住域の問題となろう。今日の集村集落とは違い、水は、飲用水に限られた縄文期の人々の居住域の問題は、豊富な帯無川上流の水の運搬で足りた筈であり、むしろ、周辺地域の自然環境が問題とされねばならぬ。

江戸時代の記録に、「一、字市ノ宮、木下町内秣場、一、芝地反別百壱町三反七畝拾九歩」（注４）とされてある。芝地としての原野地が、段丘中段一帯に存在したことは、察せられるから、この地の小動物・植物が縄文式文化人の生活基盤となろうが、この地のこのような生活環境については鳥居氏以来早くから指摘されているところである。尚、この地は、木ノ下、富田、中曽根、中原の四村の入会地として利用され、上古田・下古田が入っていないことは、帯無川南部と、北部の歴史的背景をみる場合に、注目できよう。

10世紀の延喜式、倭名抄に載る箕輪地域は、豊富な歴史を物語る諏訪郡佐補と、手良の郷は、箕輪の沢と、手良の地を指すことに、だれしも異存はない筈である。（注５）



第３図　箕輪町竜西地区遺跡分布図

① 松島王墓	② 上ノ平城址	③ 福与城址	④ 田中城址	⑤ 箕輪(大清水)
⑥ 北城	⑦ 上の林	⑧ 本城	⑨ 中道	⑩ 待屋
⑪ 一の宮(神社)	⑫ 堂前	⑬ 北原(上・中古墳)	⑭ 五輪	⑮ 堂地
⑯ 五斗山	⑰ 北垣外	⑱ 中曽根	⑲ 縦木沢	⑳ 南原
㉑ 深沢北	㉒ 十郎	㉓ 一の宮	㉔ 竜ケ崎	㉕ 北原(下古墳)
㉖ 木ノ下(秋宮)	㉗ 御射山社(春宮)	㉘ 上段神社	㉙ 並木下	

弥生時代集落群としての箕輪遺跡と、6世紀の前方後円墳松島王墓と、東山道深沢駅、沢補の郷と、箕輪の歴史は、中央権力に直結する郡衙の所在が設定されてしかるべき、条件をもつことになろう。やがて、信濃源氏の源為公の伊那郡「上の平城」土着となるが、上の平城の規模と、誕生仏の銅像は、(注6)この事跡を、物語るものとして、しられている。

「尊卑分脈」による「上の平城・源為公」は、諏訪氏・知久氏・片桐氏を、子として南信州各地に配している、とくに、諏訪氏を分流としていることは、注目に価しよう。(注7)このように、南信一帯の源氏らを配した頂点が、箕輪の地へ拠をおいた歴史的環境は、平出、宮所の牧や、中央道「中道」遺跡らと関連させて考えねばならぬ。

後に、箕輪の地の支配の城となった「福与城」は、上の平城輩下の井上氏を祖とする説が有力であり、(注8)源為公以後数世の支配は、平安末より鎌倉初期にわたるものであるだけに、その事跡は、今後、究明されねばならない。鎌倉・室町期の箕輪の地についてしるせば、以下(別掲)の年表となる。

松島・大井出・上古田の村々は、鎌倉末期より確認でき、八乙女金原・八乙女の名も、南北朝期より確認できる。ここで、注意されることは、木曽谷、木曽氏の伊那との交渉であろう。高遠城創始者は、木曽氏であることは、動かぬところであり、(注9)福与城・木ノ下の館について、木曽氏の勢力浸透を物語る記録は、多く残されてある。権兵衛峠より、或は牛頸峠よりの木曽との交流は、本遺跡の通路として、注目できよう。

遺跡の発見地「一の宮」には、箕輪郷の郷社としてしられる「箕輪南宮神社」が祀られた地としてしられている。「一の宮」の南宮神社が箕輪町木ノ下の地へ遷宮されたのは、慶長20年(1615年)のことと、されているが、「元和偃武」のこの年に、「鹿踊り」が奉納されたことが、記録に残されてある。(注10)その規模は、今日の鹿頭祭と変りがないことは、注目せねばならぬし、その起源は、永禄年中、郷域の村人が雨乞いを祈願し満願の結果発したものであるとされている。(注11)天竜川を挟んだ「南宮神社」、「春宮(木ノ下一の宮)」と、「秋宮(三日町)」と、御射山神・鹿頭祭は、箕輪地方、帯無川以南の東西にわたる広域にわたっていることが注目できよう。(注12)春宮は、「一の宮」に置かれ、御射山の穂掛け、ではないわけである。鎌倉・室町期より、「一の宮」に神事の聖地が設定された歴史的・社会的条件に注意したい。　　(堀口貞幸)

文治2年	1186	蕗原荘 近衛家支配(吾妻鏡)
元徳元年	1392	福与・松島・上古田・大井弓(諏訪文書) 長岡正眼智鑑禅師
宝徳3年	1452	八乙女金原(諏訪下社文書)
享徳4年	1455	蕗原荘小河内(無量寺胎内墨書) 大井弓箕輪殿(花会史料)
長享2年	1490	伊那之八乙女三郷、長岡、小河内
文明9年	1477	箕輪郷藤沢遠江守信有
天文14年	1545	三日町、松島原、箕輪羽広
天正17年	1589	木ノ下・富田・下寺・下古田

第1表　箕輪地域各部落の歴史(信濃史料より)

参考文献

注①　「先史及び原史時代の上伊那」　鳥居竜蔵著、大正15年刊の遺物発見地各表を参照。

②　「信濃史料」　上　昭和31年刊 265頁。
「上伊那誌」歴史編　昭和40年刊 59頁。

③　「下伊那郡史」4巻　市村咸人著　昭和36年刊 642頁参照。
市村氏の地名考証による駅址設定地「待屋」は、縄文式中期の包含地であり、土師・須恵等の出土はない。
むしろ、深沢川の北の支流には、北の森上・中・下の三つの円墳が近く、弥生・須恵・土師の遺物が多量に発見されており、更に、「和鏡」の発見があることから、堂前より、池の御堂周辺ではないかとする。笠原政市、小池修兵氏の説もある。(「伊那路」3の2所載)同書644頁参照。

④　木下村「村明納帳」　元禄12年、天保8年。

⑤　その他「美和」を、伊那の箕輪とするか、諏訪の「美和」(神)とするか分れるところであり、「土武」を伊那に置く説もあるが、これは、誤りであろう。

⑥　上の平城址と城下町については、昭和8年刊、長野県史蹟天然記念物報告書　所載「上の平城址」市村成人著の報告文、城下町図参照。
「誕生仏」についての考察は、鳥居氏の著(注①)に詳しく紹介されている。

⑦　「尊卑分脈」(国史大系本)源満快の項参照。これについて、赤羽篤氏(上伊那誌歴史編366頁)と宮下操氏(下伊那史4巻46頁)の見解があるが、上の平城主、源為公より分れたものであることの否定はない。尚「尊卑分脈」によれば、源為公は、清和天皇三代の後胤　源満仲の弟、満快の曽孫に当り、従五位下、信濃守として、着任し、三十余の氏族を配している。尚、その着任年代は、長治元年(1105年)頃のことであり、下伊那、神の峯への移転は、承久の変(1221年)後のこととされている。(宮下氏の前掲書48頁参照)

⑧　「尊卑分脈」井上氏の項　上伊那郡史1138頁参照。

⑨　長谷川正安氏「高遠氏の築城と盛衰」(伊那路15の2号)など参照。

⑩　「元和元年南宮神社大明神鹿踊由来書」(天和年間作製)や「村明細帳」に、脇坂支配木下陣屋の家中が鹿踊を出迎え、鹿踊の連中は、陣屋広場で、踊りを披露している。

⑪　注⑩「伊那温知集」など参照。

⑫　拙稿「鹿踊と郷域神事」(伊那路最近号発表)参照。

第II章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至るまで

伊那西部農業開発計画は、長野県南部、伊那市西部に位する天竜川右岸の巾約3㎞、長さ15㎞の狭長な地域で標高750m～950mの洪積台地である。地区内には数条の渓流が流下しわずかに棚田の水源となっている他、全く水利施設がなく又、この地域の平均降水量1200㎜内外でその分布も一様でないため殆んどが畑地で経営は極めて不安定である。開発地域は約3300haでその土地利用状況は畑2440ha、水田750ha、平地林及び原野100haとなっている。

たまたまこの地籍内を中央高速自動車道路が縦貫するため、中央道の建設に合せこの地区を大規模土地改良事業地区として用水を確保し、農道を整備し、機械装置化体系づくりをするべく開発計画が進められ、大規模農道整備工事が昭和46年より着工の段階となったので箕輪地区内の道路総延長6.3㎞、農林省（南信土地改良事務所）管括分3.75㎞内の遺跡として唯一の並木下遺跡の発掘を行なわざるを得なくなった。

このため昭和48年8月22日南信土地改良事務所は箕輪町教育委員会に埋蔵文化財の発掘調査を依頼し、協議の結果9月27日より発掘調査の運びとなった。

（イ）調査受託面積　400㎡

（ロ）委託契約期間　昭和48年9月27日～昭和49年3月30日

（ハ）調査日程　発掘調査6日間

（ニ）調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
調査主任	堀口貞幸	長野県考古学会会員
調査員	清水英樹	日本地質学会会員　理学博士
〃	小池政美	長野県考古学会会員
〃	柴　登己夫	〃
〃	白鳥　伝	箕輪町文化財調査委員
事務局	河手貞則	箕輪町教育委員会教育長
〃	福原良明	〃　社会教育課長
〃	小林恭治	〃　社会教育主事
〃	唐沢　悟	〃　公民館主事

大規模農道遺跡調査の経過一覧表

48．8．22　南信土地改良事務所より並木下遺跡、中原遺跡の発掘調査について箕輪町教育委員

会へ発掘調査の委託の旨通知あり。

48．9．2　教育長、事務職員、堀口貞幸、柴登巳夫、小池政美氏により現地調査、調査団の編成と発掘調査の進め方について検討。

48．9．6　調査団による発掘調査日程について決定。

48．9．15　教育長、事務局及び調査団並びに人夫５人により現地の試掘調査。

48．9．17　南信土地改良事務所係員が来町して発掘調査の推進状況について打合せ。

48．9．18　小林主事、南信土地改良事務所に於て田中主幹と発掘調査計画について細部打合せ。

48．9，18　文化庁へ緊急発掘調査届を提出するとともに、南信土地改良事務所へ発掘調査の委託事業計画書と委託事業を承諾する旨回答。

48．9．　南信土地改良事務所と箕輪町長と並木下遺跡発掘調査について880,000円にて委託契約を締結する。

（小林恭治）

第２節　発　掘　日　誌

９月27日　８時30分全員現地に集合し、発掘方法について綿密な検討をする。ブルトーザーを入れ表土剝ぎを実施し、それが終了次第直ちに１号から11号トレンチを設定する。１～２号トレンチは２ｍ平方のグリットを設定し、交互に掘り始める。表土より1ｍ位にてローム層に達する。縄文中期土器片３片・石斧１本を掘り出す。午後10時頃、３～４号トレンチへ移り一斉に作業を進める。縄文中期土器片２片発見、同トレンチを掘り進めていったところ黒土の落ち込みがあり周囲を拡張し、プラン確認に主を置き、これを第１号住居址と決める。作業終了間近になって住居址内より多くの焼土や炭化物を、続いて炉縁石の１つを検出し、全員安堵し、夕闇の中を家路へと足をはやめた。

９月28日　本日は第１号住居址へ数人を投入して調査を進める。残りの作業員は５～７号トレンチへ配分して掘り下げを実施する。5号トレンチ南寄りに拳大程の石が人為的に集められ、さらに、それはローム層に組み込まれている遺構を発見、これを第１号集石群とする。同号トレンチは他には遺構なき模様につき、この地点を残し、８～９号トレンチへ移す。第１号住居址の炉内に埋甕が、さらに東壁に密着して自然石による石棒が発見される。

９月29日　第１号住居址を完掘し、清掃を終える。第１号集石群の広がりを確認するとともに掘り下げを開始する。８～９号トレンチは遺構がなく、

発掘風景　１

10号トレンチへ作業員を移し、全面排土するも落ち込みなく、また出土品もなかった。

午後、第１号住居址と第１号集石群の写真撮影を終える。作業終了後団長を囲み調査団会議を開催し、今後の方針をたてる。

10月１日　12号トレンチの発掘調査と第１号住居址、第１号集石群の実測を行なう。

10月６日　午後２時より現場に集合し、12号トレンチを掘り下げる。第１号集石群の石を排除してみると底部に石を敷きつめてあり写真撮影を終え、実測を行なう。

10月10日　遺跡地の全体測量と地形測量を行なう。夕方、団長を囲み報告書について話し、進行について協議する。

10月30日　公民館にて第１回編集会議を開き、執筆、作図、図版の分担を決め、この次の会議までに作製してくるように申しわたす。

11月13日　公民館にて第２回編集会議を開き、編集方針を決める。

12月20日～30日　報告書の編集をする。

（堀口貞幸）

発掘風景　2

参加者名簿

伊那北高等学校歴史研究部

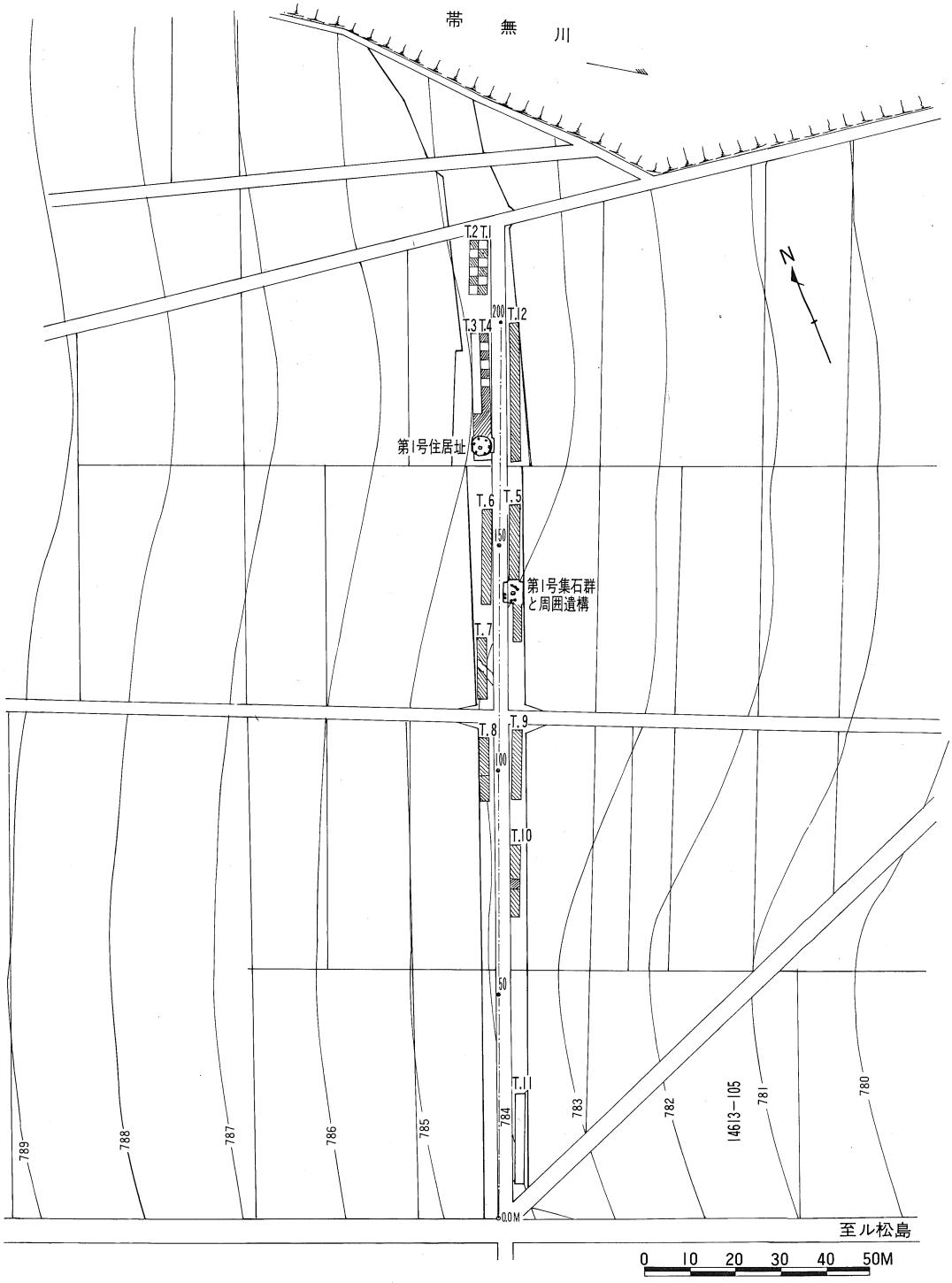
荻原　茂、田中健次、武田政弘、松田章孝、田村秀治、飯島　旦、藤森英彰
有馬英二、伊東修一、小宮文明、東条哲雄、木下　久、小池幸夫、阿部　聖
小林正樹、北沢高宏、小野高志、小林鉄彦、大槻充也、後藤博明、宮坂　浩
赤羽洋二、金沢　賢、三沢真吾、上原一成、北原史朗、大槻敏郎、永井　正
竹入　豊、肥後公人、斎藤邦彦、清水隆男、北川浩一、加藤正博、浦野幸雄
塩沢裕一、熊谷　健、山川　裕、北原靖之、有賀正志、白鳥英之、笹川昌寛
田畑徳明、浦野　守

弥生ヶ丘高等学校郷土クラブ

堀川ちづる、山田豊子、松本美代子、清水道子、大沢真由美、矢島奈美

第Ⅲ章　遺構・遺物

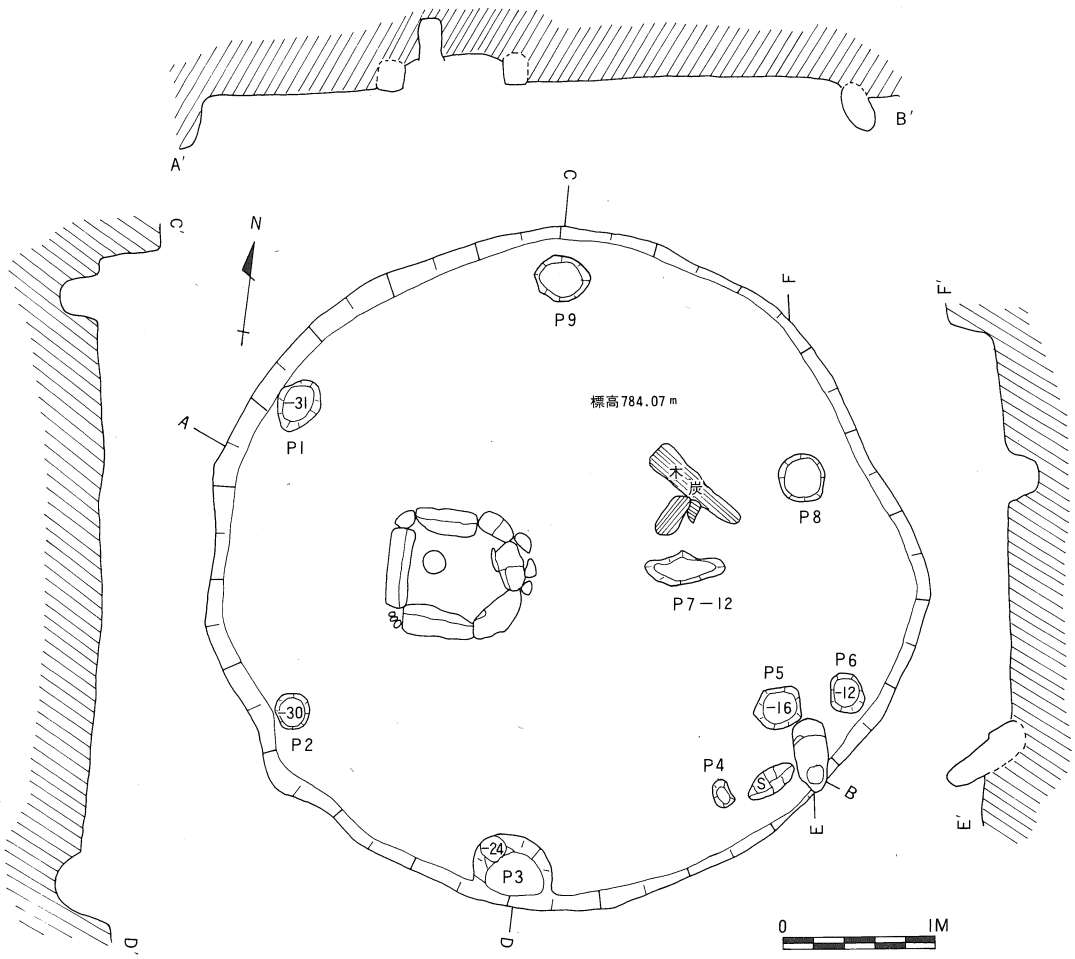
第1節　遺　　構



第4図　全体測量図

第１号住居址（第５図、図版２）

本址は３号、４号トレンチ南寄りに発見され、砂礫混合ローム層を掘り込んで構築した竪穴住居址であり、東西４ｍ70㎝、南北４ｍ50㎝の規模を有し、円形プランを呈している。側壁は全周しているが、基盤が西から東への傾斜の為に西は高く、東は低くなっている。壁高は15㎝～40㎝を計る。状態は西、北は垂直に近似し、南、東はわずかであるが内傾し、さらに細礫を含む故に各所に凹凸が認められ、崩壊しやすくなっている。床面はローム層そのものに設けられ、遺存状態は良好で、堅いタタキが全面に及び、若干の凹凸があり、細礫がところどころに露出していた。全般的に床面より10㎝程浮いた面に多量の炭化物や焼土が検出された。また中央よりやや北寄りに棒状の炭化物が認められ、これは住居址の骨組みに利用した棟木の変化した姿であろう。
以上の様相からして火災にあった事実を確証できる。



第５図　第１号住居址実測図

柱穴はP_1、P_2、P_3、P_8、P_9の５本であり、いずれも主柱穴をなし、ほぼ等間隔に配置されている。炉は中央より南西よりに位置し、大小さまざまな10個のホルンヘルスの自然石を西、南、北側は方形に、東側は弧状に組み、全体的には不規則な方形石囲炉である。

炉縁石は平坦な面を内側に向けており、なかには火を受けて赤く変わり、幾筋かの亀裂を認めた。炉内の西寄りに正位の埋甕があり、それは炉底よりローム層へ25cm程埋めてあり、甕内は黒土と多くの炭化物や焼土が充満していた。

東壁に接して、かつ横たわるようにして、ホルンヘルスの自然石が発見された。頭部は壁外へ露出し、耕作土下層面にまで達しており、石材が軟質であるために風化が顕著で崩壊しやすくなっていた。立石の一種と思われる。

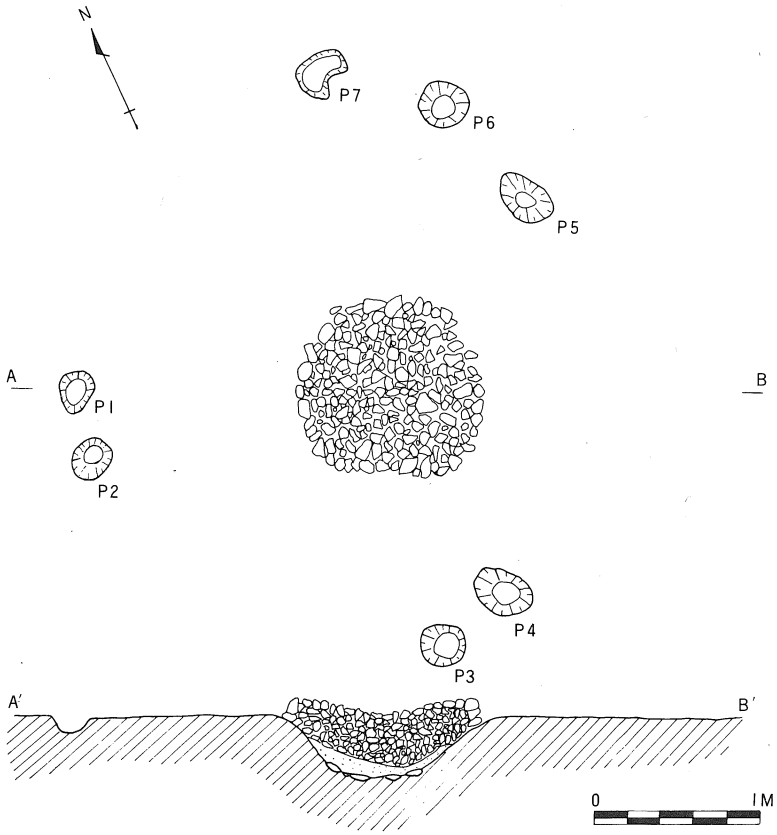
遺物は火災にあった住居址にしては極めて少なく、わずかに炉内の埋甕より時期決定が可能であり、それによると加曽利Ｅ式である。

（小池政美）

第１号集石群及び周辺遺構（第６図～８図、図版３）

５号トレンチ中央より南寄りに礫群が検出された。礫群の規模をつきとめるために拡張してみると、それをとりまくようにして７個のピットが検出された。ピットの配列状態は一見して３つのグループに大別できよう。1つはP_1、P_2、１つはP_3、P_4、もう１つはP_5、P_6、P_7である。深さは全般的に10cm程を測り、その周囲はローム層がかなり堅く踏まれていた。

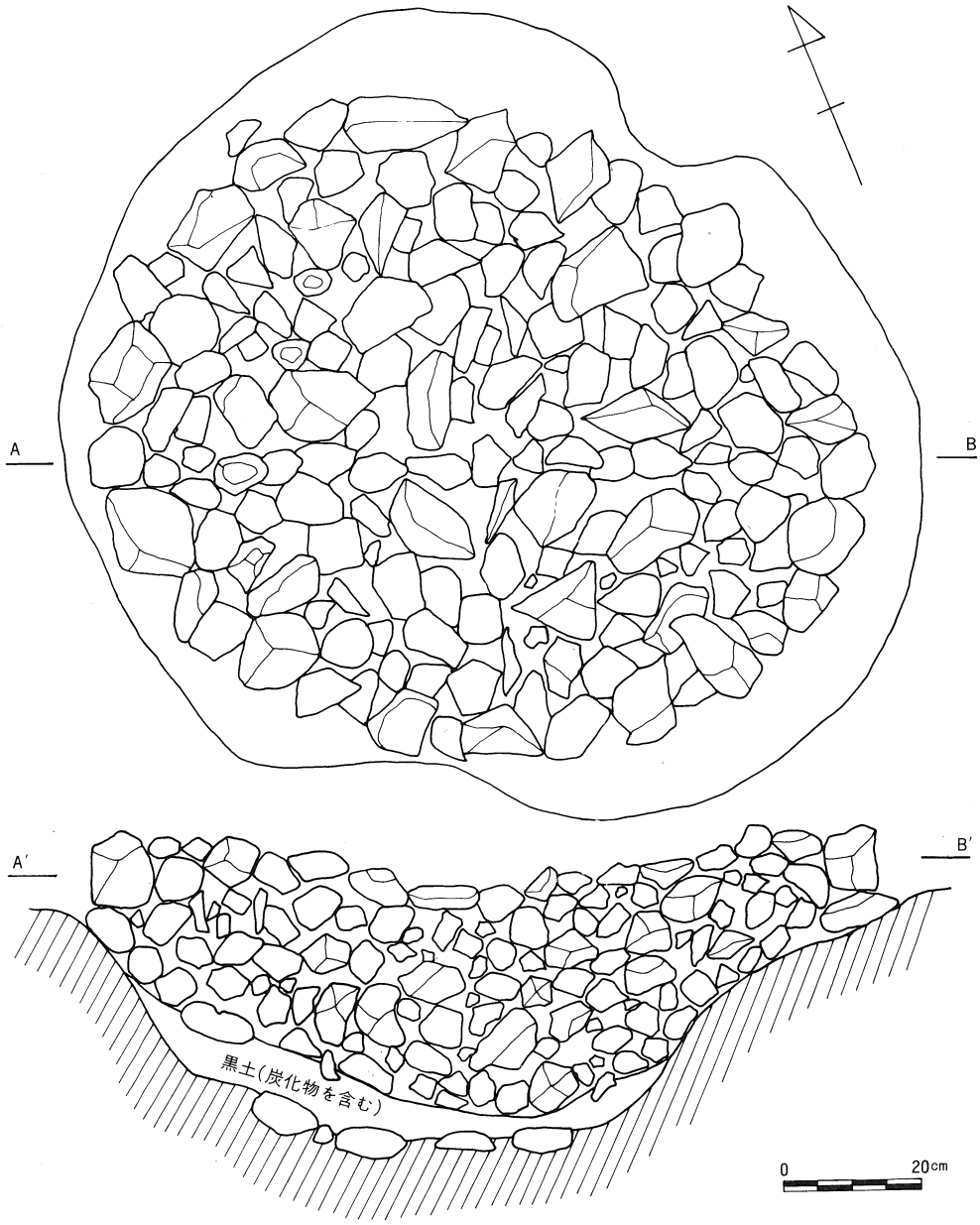
礫群の礫は800個程からなり、石質は頁岩、粘板岩、ホルンヘルス、砂岩等多種多様であった。礫の大きさは拳大から頭大までで、中の半数ほどは火を受けている。これらの礫は、漸移層からローム層に



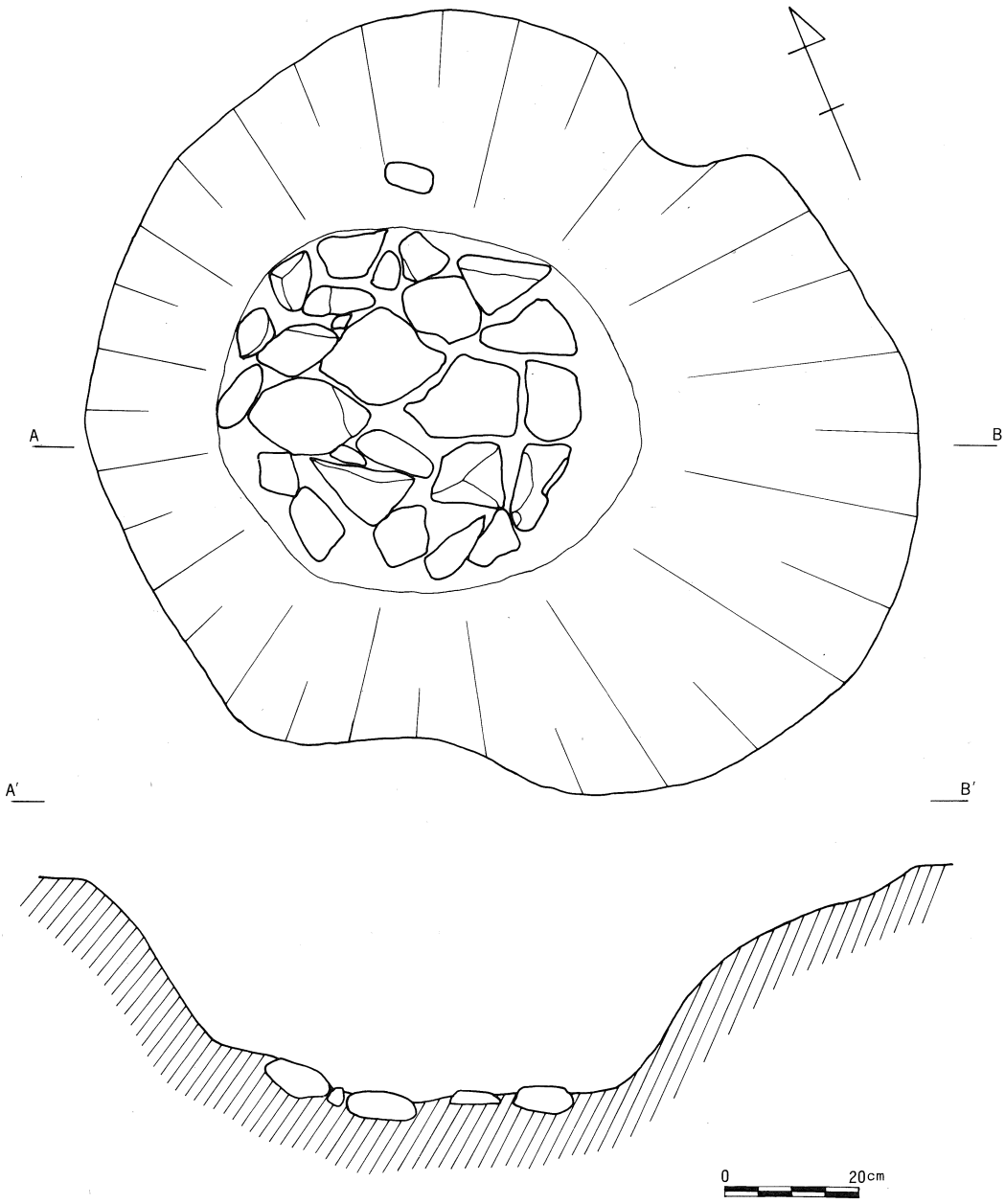
第６図　第１号集石群及び周辺遺構配置図

入り込み、東西１ｍ20㎝、南北１ｍ程の範囲で広がり、形状は楕円形を呈している。状態は二重になっており、上段は漸移層中に10㎝、ローム層に25㎝程入り込んでいる。上段の礫群の下に約10㎝の帯状の黒土が入っている。これには炭が多量に混入している。

下段の礫群は帯状の黒土の下に20数個からなる礫を平らに敷きつめてあるように形成されている。この二つの礫群共に角礫が多く、円礫は２～３割程度である。この中の出土遺物としては、帯状に入った黒土上層に凹石が一個混入していたことは注目される。　　（柴登已夫）



第７図　第Ⅰ号集石群上部実測図



第8図　第Ⅰ号集石群底部実測図

第2節　遺　　物

土器〔第9図、第10図（1～16）、図版5〕

第9図に記載された土器は第1号住居址炉内より埋甕の状態で出土したものである。器型はキヤリパー型を呈する深鉢形土器である。文様は口縁部が欠損してしまって不明であるが、おそらく渦巻文様が付けてあったと想像される。胴部から底部にかけて細い斜縄文が器面全面を飾り、その上にヘラにより蛇行状懸垂文を施し、文様に変化をつけている。色調は茶褐色を呈し、部分的に炭化物が附着している。胎土中に長石を含み、焼成は中位である。加曽利E式である。

第10図の土器拓影について述べてみよう。

（1～4）は第1号住居址より出土した土器片であり、縄文中期後葉加曽利E式に含まれるであろう。1はわずかに内反し、口唇部は外そぎであり、中厚手に層している。文様は口縁直下に無文部を残し、下部は二本の沈線が横走し、それによって囲まれた中に深い沈線が左から右下りに斜走している。色調は黄褐色を呈し、胎土に長石を含み、焼成は良好である。

（2、4）は粘土紐貼り付けによる渦巻文が著しいもの。いずれも内反し、口唇は内そぎであり、厚手に含まれ、10㎜程もある。色調、胎土、焼成は1と類似している。

3は撚糸文が施されているもの。色調は黒褐色を呈し、胎土に長石、雲母を含み、焼成は良好である。

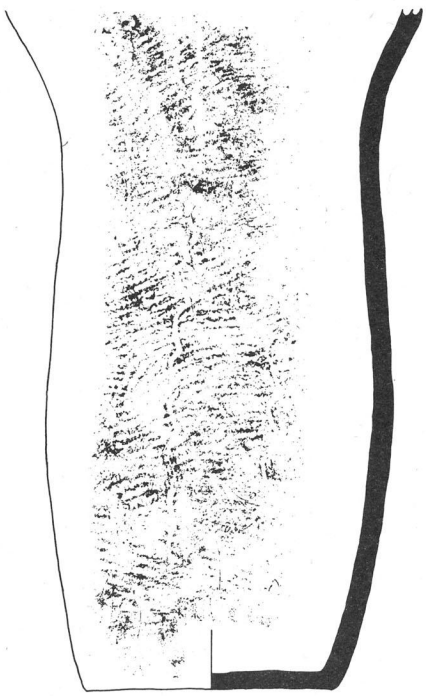
（5～11）は第1号集石群附近より出土した土器片であり、縄文前期終末諸磯期に位置する土器群と考えられる。これらの土器群を施文具によって分類してみると、縄文（5～9）、竹状工具（10～11）がそれぞれ文様主体を成している。縄文を細分してみると5は太目の斜縄文の中に部分的ではあるが無文部が見られる。（6、8）は破片全面に斜縄文が及んでいる。

（7、9）は細目の羽状縄文が施されている。

10は無文部と直径3㎜程の中空竹管状工具による円形刺突文の組み合せで成立し、配列は不規則である。

11は半截竹管による沈線文が雑然と走行している。色調は黒褐色（5～6、8、10～11）、赤褐色（7）、茶褐色（9）を呈し、焼成は中位であり、胎土に多量の雲母を含んでいる。

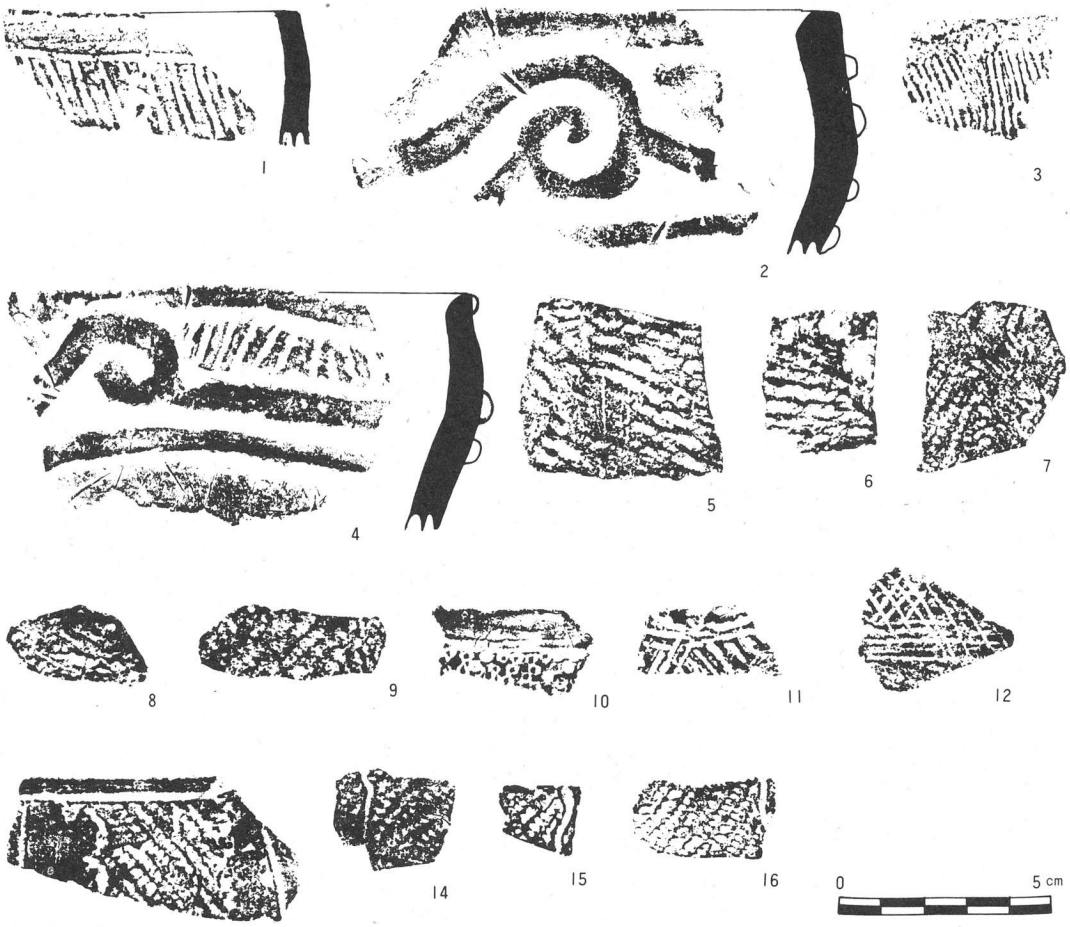
（12～16）は遺構以外のトレンチから出土した土器片である。12の文様は二本の沈線を交叉させ、菱形文を構成している。色調は白茶色を呈し、焼成は極めて良好である。色調からしておそらく関西地方から波及してきた土器群の一派であろう。



第9図　土器実測図（1：3）

13は結節のS字状文を有している。色調は茶褐色を呈し、胎土に多量の雲母を含んでいる。

（14～16）は斜縄文地に沈線による懸垂文を蛇行状に施してある。 色調は赤褐色（14）、黒褐色（15～16）を呈し、胎土中に微量の雲母を含み、焼成は良好である。この一群は加曽利E式であろう。 （柴登巳夫）



第10図 土器拓影図

石器〔第11図（1～3）〕

今回の発掘で出土した石器は次に述べる3点のみである。

打製石斧〔第11図（1～2）〕

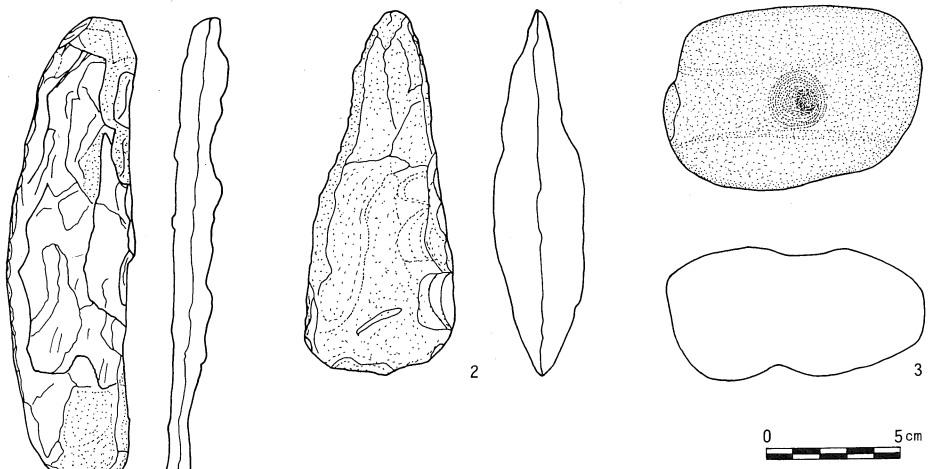
打製石斧の概念規定は自然石を打ち欠いたり、調整したりしたものである。形態からして、短冊形（1）、撥形（2）に分類できる。1は木曽山脈に産するホルンヘルスを、2は天竜川水系の硬砂岩をそれぞれ石材として用い、調整は両者とも雑である。2は打製石斧としては断面が割合に分厚くなっている。

凹 石 〔第11図（3）〕

楕円形状の花崗岩を利用して、表面中央部と、裏面にそれぞれ1つの凹みを穿けてある。

第１号集石群の石の間から出土したもので、焼石の状態になったらしく、赤味を呈している。

（柴登巳夫）



第11図　石器実測図

第Ⅳ章　所　　見

伊那西部農業開発計画は、中央道の建設に合せこの地区を規模土地改良し、用水を確保し、農道を整備し、機械化による農業経営を進めるため、大規模農道整備工事が昭和46年度より着工となり、箕輪地区内の工事計画の中に、埋蔵文化財含蔵地並木下遺跡が所在していることにより、記録保存のやむをえざる状況となり、南信土地改良事務所より箕輪町教育委員会が委託を受け、昭和48年９月27日より発掘調査を実施した。ここでは、発掘調査の過程において把掘し得た所見と問題点を記して今後の研究と保存措置の参考に資したい。

まず**第一**は、本遺跡の**規模と立地**であるが、遺跡の広さは東西200ｍ、南北150ｍの範囲は降らないと考えられる。帯無川を夾んで両河岸段丘上に分布するものと推定される。今回は大規模農道の用地内に限定されている関係上、この地域内の調査を行なった。その結果、縄文中期末葉の住居址１軒と、集石群１箇を調査し得た。

次に、遺跡の立地であるが、伊那谷の遺跡分布の一般的傾向は、諏訪湖に源を発し伊那谷を南北に流れる天竜川の河岸段丘上と、木曽山脈及び赤石山脈より流出する大小支流河川の段丘上と、山麓地帯とに主に分布しているが、中には地形的好条件を備えた地域にも遺跡が所在する。本遺跡は、帯無川の中流地域に当り広大なる平原地帯にあり、また、山麓地域に降雨した雨水がこの中間の不透水層面に湧水している箇所が、本遺跡を中心として南に南箕輪村高原、大泉、伊那市月見松、北に中道等主要な遺跡に共通して居り、本遺跡とまったく自然的条件を一つにしている遺跡である。

帯無川沿岸には樋木沢、一の宮、五斗山遺跡等が分布している。また、帯無川の形成した木ノ下扇状地には弥生式以降の主要な遺跡が所在する。以上河川によって作られた遺跡の多いことに注目したい。

今回発見された住居址は、１軒のみであったが、この附近一帯には縄文式土器片の散布が非常に多いところより、相当大規模な遺跡と推定される。本住居址は縄文中期末葉加曽利Ｅ式に含まれる一般的な住居址であるが、内二、三特殊な施設が認められたので、ここで紹介しておく。

先ず、石囲炉に甕が埋められていたことである。埋められていた深鉢は第９図の実測図に示されている様に口唇を欠いた土器で、埋められた状態は炉の略中央で、深さは炉縁より約10㎝程低い位置にきちんと埋められてあった。これら埋甕の状況からして火壺としての性格が明確のように考えられる。このほか伊那谷で現在迄知られている加曽利Ｅ期の埋甕炉は、駒ヶ根市藤山遺跡第８号住居址、大城林第１号、第２号住居址、飯島町尾越遺跡第15号、第16号、22号住居址、高森町的場遺跡第16号住居址等に同一種類のものが見受けられる。なお、加曽利Ｅ期以外の埋甕炉については後日発表の予定をもっている。

立石、東側の壁に接して発見された。石質はこの地域に産するホルンヘルスの自然石、立石の状況は、床面にわずか掘り込んで埋められてあった。発掘された時は頭部に南に30度程の角度で傾けていたが、立てられた当時は直立していたものと思われる。すぐ南側にも自然石が１箇立石に附随した形で発見されたが、石質の腐蝕が激しくその意味を復原することはできなかった。立石建立の種類には、まったく単独で建てられている場合と、周辺に敷石をするか石壇を作るかした施設が附随するものがある。駒ヶ根市東伊那山田第１号住居址の例の如き石壇のあるもの。尖石与助尾根第７号住居址も同例である。単独のものは、伊那市御殿場遺跡第５号住居址、飯島町尾越遺跡第28号住居址、両遺跡とも加曽利Ｅ式である。そのほか、立石の伴う例は東北（青森・岩手・秋田）関東（相模山寺・伊豆見高）甲斐国（大塚）等の諸遺跡に類例を見る。

大場磐雄先生は、東伊那遺跡の所見で、火の神又は炉の神の信仰か、炉事に関する設備が今のところ断定は避けておきたいと述べられておられる。私も研究不十分であるため今暫らく研究した上で結論をだしたい。

集石群、本遺跡発見の集石群は、集石炉とするか、集石群とするかで論議が行われたが結局性格的要因から集石群として扱うこととした。大きさは1.20×1.00ｍ、深さ25㎝擂鉢型、底部は20数箇の石を平に敷詰められてあった。敷詰められた石は焼けてはいなかった。この擂鉢状の穴にローム面より僅か上った面黒土中より集石されていた、最上部の層の下に10㎝の石の混在はなく黒土の層であった。その下部にはこうした層は見受けられなかった。下部まで順次取除いて見るも時期を決定する遺物は遂に発見されなかった。集石の数は800箇、大きさ拳大～頭大のものが多かった。石質は粘板岩・ホルンヘルス・硬砂岩・頁岩等、焼石はその半数に達している。底部敷石の上には多くの木炭片が検出された。以上が出土状況のあらましである。ここで集石付近に発見された遺構及び遺物を付け加え参考に資したい。実測図で見る如く、集石を取り巻くピットは集石を中心として1.0～1.5ｍの楕円形に、径20～30㎝、深さ10㎝内外に配列されている様にもみられ、何かの簡単な上屋を思わしめる。また、北～東側に縄文前期未諸磯式土器がピットと同一レベル層より発見された。ここで、大変残念なことは周囲からは遺物が出土したが、肝心な集石群中からは一片の遺物も発見されなかったので、決定的な時代を与えることができなかった。

現在のところ、早期押型文土器に伴う集石炉の範ちゅうにははいらないものと考える。用途は調理もしくは保温用ではなかろうか。

調査主体は勿論、参加された皆様に心から御礼を申し上げる。

（団長　友野良一）

並木下遺跡の文献目録

1	上伊那郡伊那村遺跡 第1次調査概報	信濃三巻六号	昭和26．6．15
2	信濃資料 第1巻下	信濃資料刊行会	昭和31．3．31
3	上　　原	長野県教育委員会	昭和32．12．1
4	尖　　石	茅野教育委員会	昭和32．12．15
5	日本の考古学	河出書房新社	昭和40．7．30
6	上伊那誌（歴史編）	上伊那誌編纂会	昭和40．10．1
7	御殿場遺跡緊急発掘調査報告概報「信濃」	伊那市教育委員会	昭和42．1
8	唐 沢 洞	長野県考古学会	昭和46．3
9	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	日本道路公団名古屋支社 長野県教育委員会	昭和47年度
10	長野県考古学会誌	長野県考古学会	昭和48．5．25

南側より遺跡地を眺む

東側より遺跡地を眺む

図版Ⅰ　遺　跡　全　景

第Ⅰ号住居址

第Ⅰ号住居址(炉)

第Ⅰ号住居址(石棒)

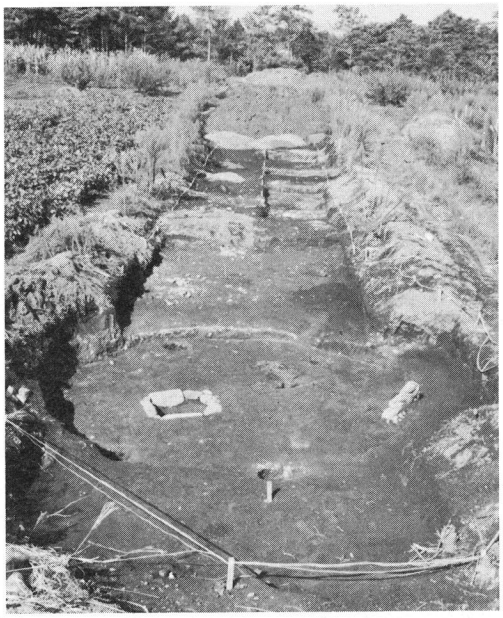
図版2　遺　　構（第Ⅰ号住居址）

第Ⅰ号集石群上部

第Ⅰ号集石群底部

図版３　遺　　構（第Ⅰ号集石群）

1号・2号トレンチ

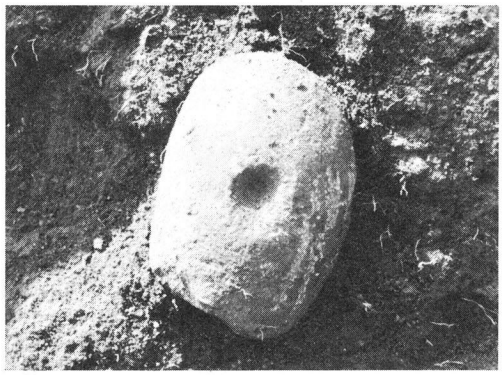


3号・4号トレンチ

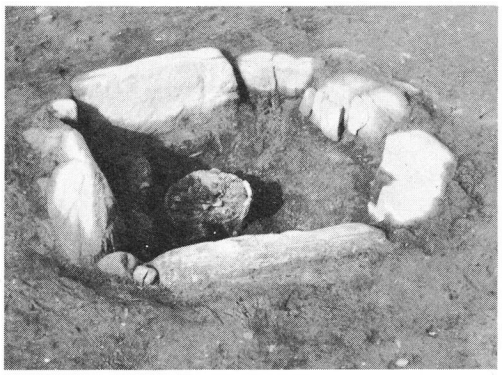
9号トレンチ

10号トレンチ

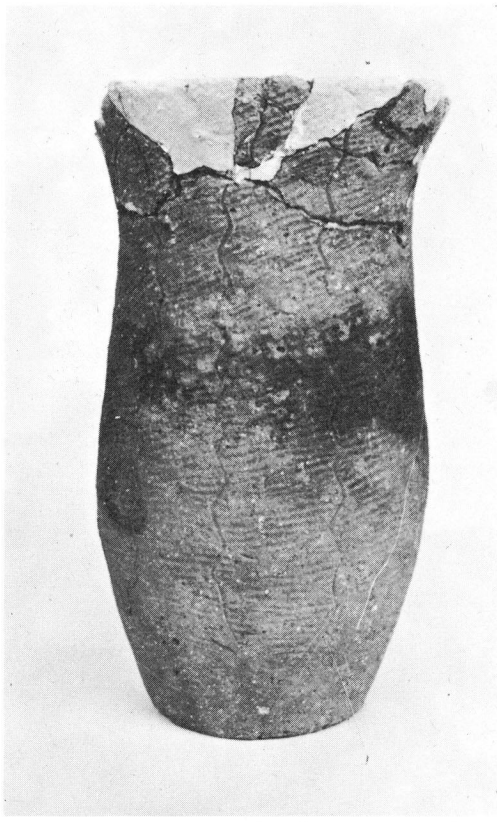
図版4　トレンチ全景



石器出土状況（第Ⅰ号集石群）



土器出土状況（第Ⅰ号住居址炉内）



完 型 土 器

記　念　撮　影

図版５　遺物出土状況及び記念撮影

木下並木下遺跡

～緊急発掘調査報告～

昭和49年3月30日　印　刷
昭和49年3月31日　発　行

発行所　長野県箕輪町教育委員会
南信土地改良事務所

印刷所　伊那市 小松総合印刷